

# ヒラメのクドア対策、マグロ養殖の今後など

## 第14回ACNフォーラム

NPO法人アクアカルチャーネットワーク主催による「第14回ACNフォーラム(日本の水産増養殖を考える会)」が、8月25日、福岡市内で開催され、種苗生産・養殖業者、資材メーカーや商社、研究者など124名が出席した。ヒラメの新種クドア問題、クロマグロ養殖の今後の展望に関する講演と質疑応答に加え、長崎大学による地域再生型人材育成プログラム「海洋サイバネティクス」の成果報告も行われた。

冒頭挨拶した田嶋猛ACN理事長は、“クドア食中毒”について触れ、この問題に対する関係者の確かな理解と、それを踏まえた現場対応および情報開示の重要性を訴えた。



田嶋 猛・ACN理事長(太平洋貿易社会長)

次いで、長崎大学大学院の山本尚俊准教授が「**転機に立つマグロ養殖業—その歴史的展開と今後の展望**」、東京大学大学院の横山博助教が「**クドア属粘液胞子虫について**」と題して、それぞれ講演した。

山本氏は、天然クロマグロの資源問題、養殖マグロの需給変化などを世界的・経時的に解説した上で、①天然物の漁獲減などで供給量が減少しても、市場の大衆化等により大幅な価格上昇は期待薄であり、養殖業者はコスト競争から逃れられない、②原料魚・餌料魚の調達力やマーケティング力がこれまで以上に問われる、③そのため、中小のマグロ養殖業者が大手マグロ養殖業者の傘下に入るケースも出てくるのでは?などと述べた。

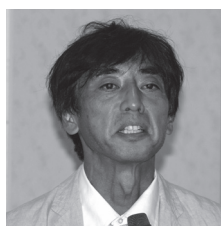
横山氏は、食中毒の原因となるヒラメの新種クドア「クドア・セプトンククタータ」について、その生物学的特徴などを詳解し、当面の対応策としては、①種苗導入段階から出荷時までには検査を実施し、感染していた魚群は排除する、②検査結果はホームページ等で積極的に公開し、消費者にアピールする。今後の課題としては、①寄生の程度に関して、流通・販売する際の基準値を設定する、②種苗生産場での給水処理により感染防除が可能か検討する、などを指摘した



山本 尚俊氏(長崎大学大学院准教授)



横山 博氏(東京大学大学院助教)



萩原 篤志氏(長崎大学大学院教授)



関 英三氏(関水産)

(前月号掲載の「ヒラメのクドアによる食中毒について」参照)。また、やはり粘液胞子虫が原因であるトラフグのやせ病についても解説。2種類ある原因虫のうち、より問題なのは水平感染する「エンテロミクサム・レイイ」であり、感染魚の排泄物由来の虫体を他の魚が口に入れている可能性があるため、未感染種苗の導入や水中に放出された虫体の除去もしくは希釈が重要、とした。

海洋サイバネティクスについては、長崎大学大学院の萩原篤志教授による主旨説明の後、その研究成果の1つ「底曳き網で漁獲廃棄される魚介類を飼料として用いたトラフグ養殖の試み」について、同プログラム2期生である関英三氏(関水産)が発表を行った。既存のMPにも勝る成績が得られ、フードマイレージの軽減にもつながったという。

A